

福祉のひろば

特集

平和と福祉シリーズ
原爆と原発

—原爆も原発被害も日本で起きた私たちの問題

8
2013



ひろばトーク

全国福祉保育労働組合東海地方本部 副執行委員長
第19回社会福祉研究交流集会 若手分科会担当実行委員

てらさか わたる
寺坂 渉さん

若者が自分の仕事にやりがいと誇りを持てるように

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



四六判・224頁
定価 1785円(税込)
ISBN978-4-89464-185-3



育ちあう風景

清水玲子 著

本誌好評連載
「育つ風景」を
単行本化

徹底して子どもの側に立つこと
親の気持ちに思いを馳せること
仲間を信頼し支えあうこと
大切にしたい保育の精神が
65編の心ぬくもる物語を通じて
胸にしみいるように伝わってきます

たくさんさんの保育の人との出会いが
私に保育を教えてくれました。
子どものこと、保育の悩みを
時を忘れて語りあってきました。
はじめはもやもやしていても
夢中になっておしゃべりしていると
それがどういふことなのか
浮き彫りになってくるから不思議です。
その貴重な瞬間をとどめおくために
そして、出会った人たちの思いや
子どもの姿をそのまま
スケッチするように表したいと願って
この文章を綴ってきました。

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-17-13
TEL 03-3811-1372 FAX 03-3811-1383

ひとなる書房

E-mail hitonaru@alles.or.jp
URL <http://www.mdn.ne.jp/~hitonaru/>

ヒロシマ・ナガサキ、そして福島

核・放射能から、人として生きる権利を守る



広島平和記念公園の原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という文字が刻まれています。修学旅行生にガイドさんが話していました。「主語がないのはなぜかわかる？ あなたたち、そして地球上の人たちが同じ過ちを繰り返さない。その思いが込められているのよ」と。

アメリカの投下した原子爆弾で1945年12月末までに広島では約14万人（広島市ホームページより）、長崎では約7万4,000人（長崎市平和・原爆総合ページより）が亡くなったと推計されています。



被爆地 広島にて



福島県南相馬にて

広島での取材で被爆体験を聞かせていただいた^{あさかほるえ}浅川晴恵さん(写真上の右)は現在77歳、長崎で被爆した時は9歳でした。「核の愚かさを日本や世界に対して訴える勇気をぜひ持ってほしい!」と語ってくださいました。原発事故のあと15万人以上が避難生活を続ける福島では、避難先の南相馬市で「サラダ農園」を^{なみえ}経営する川村博さん(写真下の左)にお会いしました。ふるさと浪江町の復興をめざし、賠償だけではなく自立と就労を訴えておられます。



福島県会津若松市では県内自主避難連絡会のお母さんたち(写真上)に、そして福島市の福島医療生協わたり病院では町田理恵子さん(写真下の右)にお会いしました。自主避難している人も、まちに残って暮らしつつける人も、子どもたちを放射能から守りたいという願いはひとつです。



岐阜環境医学研究所所長の松井英介医師と妻の和子さんに内部被曝についてお聞きしました(写真上)。写真下は、今号特集の取材に取り組んだ編集室メンバー。左から谷口倫展さん、鳴川真弓さん、谷口純子さん、山本八重子さん、根津真澄さん。「原爆も原発被害も日本で起きた私たちの問題だとあらためて考えさせられました」(写真・文 広島は谷口倫展さん、福島は根津真澄さん)

【ひろばトーク】

若者が自分の仕事にやりがいと誇りを持てるように 寺坂 渉 6

●特集● 平和と福祉シリーズ 原爆と原発

座談会 原爆も原発被害も私たちの問題 9

谷口純子・鳴川真弓・根津真澄・山本八重子・谷口倫展

フクシマへ届け！ ヒバクシャからのメッセージ 浅川 晴恵 12

暮らしの復興は農業から 川村 博 18

—賠償、そして自立と就労を—

会津若松市「県内自主避難連絡会」のお母さんたちに聞く 22

家族や仲間とともに、このまちで生きる 町田理恵子 26

福島県民の生活再建への課題 戸田 典樹 32

放射線内部被曝による健康被害から

子どもたちのいのちと人権を守るために 松井 英介 34

●トピックス●

待機児童問題——地域での運動が今、正念場です！ 仲井さやか 40

第19回社会福祉研究交流集会 in 東海のご案内 46

若者がつくる「福祉のひろば」Part2 最後の編集会議が終了！ 48

●連載●

フォーラム

「企業天国・労働地獄」の社会を許さない 相野谷安孝 52

連載 小川政亮 第二部 自伝 (17) 小川 政亮 54

暴力学生による大学占拠への対応、そして金沢へ

相談室の窓から 青木 道忠 58

手厚いケアのある居住の場を (1)

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」 早川 一光 60

総合人間学のすすめ (2)

育つ風景 かみつき 清水 玲子 62

いっぽいっぽの挑戦 (5) アウトリーチ 繁澤 多美 64

映画案内 『晩春』 吉村 英夫 66

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 68

「孤独死 被災地で考える人間の復興」

なにわ銭湯見聞録 (四) ラッキー植松 70

いただきます！ すみれ共同作業所 72

ヘルシーだけどボリューム満点!! 豆腐のまさご揚げ

私の研究ノート 飯田 葉子 74

すべての人の良質な住まいの保障に向けて

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！男やもめ 川口モトコ 77

みんなのポスト 50/今月の本棚 49/福祉の動き 78

●グラビア● ヒロシマ・ナガサキ、そして福島

福祉のひろば

2013年8月号

●表紙の絵●

神門やす子

長崎にはあの日、11時過ぎに原爆が投下されました。



●カット●

川本 浩

若者が自分の仕事に やりがいと誇りを持てるように

全国福祉保育労働組合東海地方本部 副執行委員長
第19回社会福祉研究交流集会 in 東海 若手分科会担当実行委員

てらさか わたる
寺坂 渉さん

●若い職員の悩みが深刻になっている

全国福祉保育労働組合東海地方本部（以下、東海地本）では、秋に労働組合の基礎を学ぶ『労働組合講座』を行っています。この講座では、各分会から実行委員を選出し、労働者の権利や情勢について学んでいきます。その中で感じるのは、若い職員の悩みが深刻になってきていることです。

「とにかく毎日が大変」「悩みを相談したくてもなかなかできない」「やり残した仕事を休みの日にするのでリフレッシュできない」など日々仕事に追われています。私が仕事に就いた頃の若い職員の悩みの多くは、「一人暮らしをしたけれど賃金が安くてできない」というものが多かったように思います。がむしやりに仕事はしながらも、「自立して頑張りたい！」そんな思いが強かったのですが、今は気持ちが前向きになれないほど余裕がない状態のようです。

●「中堅」と呼ばれる世代の若年化と学習の重要性

事業所の多くが、今日の社会福祉をめぐる厳しい情勢に対抗すべく新規事業を展開する中で、働き始めて二、三年の職員が「中堅」職員としての役割を求められています。経験も少なく自分に自信が持てない中で、後輩を支えていく余裕もないのです。経験が少ないうえに職員が増え、支える側の「中堅」職員も若い職員も、ともに余裕が持てないこともうなずけます。

しかし一方で、労働組合講座を成功させようと、今の情勢や自分たち労働者の権利を学



てらさか わたる

1982年生まれ。趣味は子育て。保育園で保育士として働き、一児（娘）を持つ父親としても奮闘中。

んでいく中で、次第に前向きになっていく姿も見られます。みんなで悩みを共有する中で、自分だけがしんどい思いをしているわけではないことに気がつき、前向きな気持ちになれたり、自ら今の情勢や働く者の権利を学習する中で、新たに「わかる」ことが少しずつ自信につながっていく姿が見られました。

厳しい現状だからこそ、顔を合わせて語り、そして学ぶことで、あらためて自分自身を見つめなおし、自分の仕事のやりがいについて考えていけるのではないかと思います。そんな若い職員を支える意味でも、各職場で若者は深刻に悩んでいる状況に置かれていることを感じていただき、支えてもらえればと思います。

●その学べる場として、**社会福祉研究交流会を愛知で開催（八月三十一日～九月二日）**

今年の第一九回社会福祉研究交流会in東海は、「福祉職場の解体新書」おもしろさを『科学』する」というテーマで開催します（愛知大学名古屋キャンパスにて。主催は同実行委員会・総合社会福祉研究所。詳細は四六〇四七ページ参照）。若い職員が福祉の仕事の魅力やおもしろさ、楽しさをあらためて確認できる集会にしたいと思いい、企画を考えています。悩める若い職員が、自分の仕事にやりがいと誇りを感じられるように、わかりやすく今日の情勢を学び、全国の福祉に関わる仲間たちと現状を話し合い、これからについて考えていく場にしたと思っています。今年は三〇歳代までの若者が参加する分科会も行い、全国の仲間たちと思いを共有し、明日へつなげる活力をつくっていかれたらと思います。ぜひ身近な悩める若い職員をお誘いの上、研究交流会へのご参加をお願いします。

平和と福祉シリーズ

特集 原爆と原発

福島原発事故の収束はほど遠い。にもかかわらず日本政府は、緊張が増す中近東情勢の中、ヨルダン、トルコ、UAE（アラブ首長国連邦）への原発輸出を促進する。ほとんどの原発が停止状態とはいえ、五四基もが狭い国土に犇^{ひし}めいていた日本は准核保有国と称される。核兵器を製造できる核燃料プルトニウムと原子力技術を保有するからだ。そもそも日本の原発推進のねらいはそこにあると論じる人もいる。被爆国の首相でありながら原発売り込みを行う姿勢は、人類の核廃絶、戦争放棄の願いに反する。

そういえば在沖繩米兵の六割を占める海兵隊が、道東の矢白^{やうすべつ}別演習場で一三回目の訓練を行い、またも着弾地を誤る。沖繩の負担軽減という名目で開始したものだ。日本会議地方議員連盟に所属していた大阪府知事や慰安婦容認の大阪市長が、八尾飛行場をオスプレイ配備候補にと名乗りをあげる。米軍移動費を払い、さまざまなお手盛りの矢白別演習場訓練が八尾飛行場配備にダブる。今の政府や巨大マスコミは、平和を脅かし国民を危機にさらす真実を伝えない。粘り強く真実を伝えることが日々問われる。戦争体験者が少なくなったからと言って、平和の大切さを伝えることを止めてはならない。

被爆国の首相の原発売り込みは、明らかにレッドカード《即退場》だ！ この間、多くの国民が核兵器廃絶と原発ゼロは共通することを学んだ。今号では、本誌編集室メンバーが、広島、福島、岐阜の三県の方々に取材を重ね、同じ日本の国民としての、その再認識を共有していった。

（編集主幹 黒田孝彦）